

受賞者：秋津野塾

(和歌山県田辺市上秋津野)

受賞年
平成8年



むらづくりの経緯

- ・地区全住民の幅広い合意形成を図りながら、一層活発なむらづくり活動を展開するためには、全組織を網羅するむらづくり組織が必要との認識が高まり、旧村という大きな集団を一つにして、その最高意思決定機関として「秋津野塾」を発足した。秋津野塾は、地区内の全組織の代表者により構成されている。
- ・各組織からの助成金、寄付金で運営しているが、当該組織だけではなく、新住民を含む、地域全体のために活動している。

受賞当時

生産活動の特色

- みかん価格の暴落等の岐路に、農業青年が柑橘類の新品種導入を積極的に進め、全国唯一の柑橘類の周年出荷体制を整備した。労働平準化が図られ、農業基盤整備により、一層労働軽減させた。
- 農業所得向上、労働軽減により、毎年、若い農業後継者を2～4名確保(新規就農・Uターン就農者を含む)地区内専業農家の8割は農業後継者、あとつぎが同居している。



みかん栽培



Uターン就農者

地域づくりの特色

- 農産物直売場の開設に向けて、地区女性が中心となって農産物加工、商品化に取り組んでいる。
- 小学生の自然保護活動、中学生の農業体験、新住民との融和、子供と老人の交流など、様々な交流活動を展開している。



みかん刈り体験



農業体験

～受賞直後の効果～

- ・近畿地域初の天皇杯受賞が目ざされ、自らの取組を再認識した。
- ・天皇杯を受賞したことにより、地区の人たちの自信、やる気を育み、むらづくりは、自らが作り上げていくことを気づく好機になった。
- ・視察が増えたことにより、視察する地区の活動内容等、取組の情報が向こうから入ってくるようになり、非常に勉強になった。

・受賞を一過性のものとせず、10年先を見据えたむらづくりを進めるため、2年かけて全世帯アンケートや住民300人に対するヒアリングを行い、H14年にマスタープランを策定した。
「秋津野塾 未来への挑戦」として取りまとめ、インターネットで公開している。

現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- 柑橘類は80種に及び、一年中みかんが実る町として情報発信中。
- 地区の子どもたちへの農業教育や住民同士の交流は継続中。
- H18に法人化した株式会社「きてら」では、直売所事業とジュース加工事業に加え、H22には地元柑橘を活かした新商品開発と加工体験を行う「バレンシア畑」を展開、R3には柑橘類のジュースを搾った後の皮から精油を抽出する施設を新設、商品化。
- H19に設立した農業法人株式会社「秋津野」では、都市と農村の交流施設「秋津野ガルテン」を活動拠点として、農家レストランやみかんオーナー制度、農業ワーキングホリデー等に取り組み、H30には農泊事業を拡大するなど、交流人口を着実に増やしている。
- 現在はコロナ禍において、これまでの事業を活かしつつ地域の持続可能な取組としてワーケーション事業や小水力発電事業に取り組んでいる。



ジュース加工・精油施設



秋津野ガルテン

今後の展開

- OR1に設立した株式会社「秋津野ゆい」を核とした、作業請負や農機レンタル、農地借り受けによる果樹産地の維持拡大。
- ワーケーション等の受入による地域経済活性化の仕組みを検討。

受賞者：菊永むらづくり推進委員会

(鹿児島県南九州市)

受賞年
平成8年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

- ・南九州市知覧町(旧知覧町)南部に位置する総戸数130戸の純農村集落。畑台地上にあることから水源に乏しく、集落ぐるみで水の確保に取り組む中でむらづくりの機運が醸成。昭和30年代後半から茶の導入が進むとともに、平成元年に畑地かんがい施設が整備されると、青果用さつまいも、加工用大根、花木の導入・拡大が進展。
- ・むらづくり推進委員会は従来からの公民館活動を充実させるため昭和58年に設立。茶生産組織、畑かん営農組合、青果用さつまいも部会等の農業関係組織と生活改善グループ、レジャークラブ等で構成され、積極的なむらづくり活動を展開。

受賞当時

生産活動の特色

○茶の栽培面積は約120ha(地区外も含む)に及ぶ一大産地を形成。茶生産組合(37戸)が共同で摘採、荒茶の加工・販売に取り組むとともに、肥料・農薬等の共同購入により、低コスト化と品質の高位平準化を実現。

さらに、天敵微生物による低農薬栽培も推進。



土地基盤が整備された低コスト良質茶の団地

○さつまいもは、超早出しから貯蔵いもまでの周年栽培に取り組むとともに、バイオ技術を駆使した育苗、植付け・収穫作業の機械化体系を確立し、省力化と品質向上を実現。

地域づくりの特色

○毎月第3日曜日を農休日とし、集落あげてのスポーツ・レジャー活動が活発に行われるとともに、菊永の鎌手踊りや銭太鼓など伝統文化を継承。



○子供会の農作業体験、青少年育成等をテーマに講師を招いた講演会、先進地研修等を行い、“ひとづくり”と“産地づくり”の学習活動を活発に展開。



伝統芸能「鎌手踊り」(上)と子供会の農作業体験活動

- ～受賞直後の効果～
- ・茶生産組合は、茶生産コストの削減等経営改善を積極的に推進
- ・農業生産工程管理のJGAPに加え、平成27年には国際認証「グローバルGAP」を取得し、平成28年より茶の輸出(約10t)も推進。
- ・お茶のバスツアーなど消費者との交流活動も推進
- ・鎌手踊りなど伝統文化を継承
- ・体験型教育旅行の受入を推進

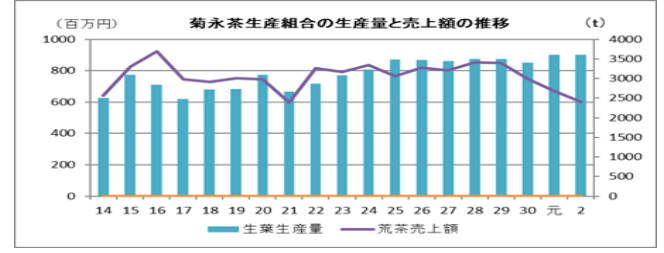
現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

○茶生産組合は、低コスト化と品質の高位平準化の取組が評価され、平成26年度に農林水産祭の蚕糸・地域特産部門において日本農林漁業振興会会長を受賞。

○H28年からてん茶栽培に取り組んでいる。また令和元年夏からは、萎凋茶(新技術:微発酵茶)にも取り組み、令和4年2月に商品化。

○コロナの影響もあり、単価が低迷している中、生産量を維持している。



○かごしまブランド産品である「さつまいも」については、JA南さつまが、かごしまブランド団体として認定を受けており、県を代表する産地として、生産・販売戦略を選定

○鎌手踊りや銭太鼓など伝統文化を次世代に継承

○体験型教育旅行の受入れ等については、コロナの影響で取り組めていないが、落ち着いたたら再開したい。

今後の展開

○新たにお茶のバスツアーに取り組むとともに、体験型教育旅行の受入れを再開し、都市農村交流活動を推進。